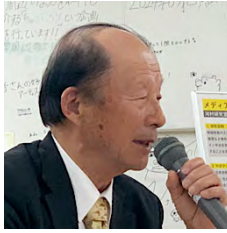


飯地ふるさと民俗資料館と飯地五毛座 Iiji Furusato Folklore Museum and Iiji Gomoza



山口鉦一 YAMAGUCHI, Masakazu

1940年生まれ。飯地五毛座歌舞伎保存会 総務（元会長）・飯地ふるさと民俗資料館 館長・飯地小学校 サポーター

飯地公民館長を務めた経緯から現在、飯地の古い生活物品、農機具、養蚕道具などを展示する飯地ふるさと民俗資料館（（旧恵那市役所飯地支所庁舎、国の登録有形文化財）の館長を務める。また、芝居小屋「五毛座」（旧飯地公民館、国の登録有形文化財）を拠点に、古くから同地で盛んな地歌舞伎を継承発展させるべく、保存会として公演を開催し、子ども歌舞伎による後継者育成に努める。他にも、キャンプ場の薪を作る団体や、小学生と地域住民の交流活動にも中心となって活躍するなど、飯地町の振興には欠かせない人物。

ABSTRACT

The Iiji Furusato Folklore Museum, housed in the former Iiji Village government office, preserves and showcases the region's history and culture. Its collection includes agricultural tools, household items, and theater-related artifacts, such as an Edo-period *karasusu* (dry mortar), a fire pump, *kasumiami* (mist net hunting) tools, and a traditional theater permit. Other exhibits, including *tsuchibina* (earthen dolls), sericulture tools, and Showa-era appliances, provide insight into the community's past. Museum director Mr. Yamaguchi has led efforts to preserve the building and local heritage, engaging in broader community initiatives such as *mizubashō* conservation, historical walks, and children's education. At Iiji Gomoza Local Kabuki Theater he has played a key role in sustaining *jishibai* (local theater) and children's *kabuki*. His dedication ensures the continued preservation and transmission of these cultural traditions.

皆さん、こんにちは。山口鉦一と申します。「鉦一」と書いて「まさかず」と読みます。「しょういち」は芸名でございます。立派な肩書きがついておりますが、「館長」などという大層なものではございません。ただ、私たちが委員会を作っており、「委員長なら館長だね」ということで「館長」と名乗っておりますが、決して仰々しいものではありません。

さて、先ほど柳谷先生からお話がありました民俗資料館について、現在どのようなものを所蔵しているのか、写真を交えてご紹介したいと思います。その後、続けて五毛座についてお話しします。こちらが資料館の建物です（図1）。



図1. 飯地町ふるさと民俗資料館

先ほどのお話にもありましたように、もともとは飯地村の役場として建てられたものです。しかし、すぐに市町村合併があり、役場としては使用されず、市の飯地支所として活用されることになりました。2階は議場として設計されていましたが、実際に総会が開かれることはなく、村会議員はそのまま市会議員になったという経緯があります。

この建物ですが、よく見ないとわからないかもしれませんが、タイルが貼られています（図2）。これは笠原産のタイルで、当時10種類ほど使用されたと言われています。当時、タイルを貼るということは非常にハイカラなことだったそうです。



図2. タイル貼りの外壁

昭和59年、新しい公民館や支所、診療所、消防の詰所などを含む複合施設が建設され、それに伴い、この建物は空き家となりました。当初は倉庫として使われていましたが、その後、ある企業が一時的にここで業務を行っていました。しかし、その企業も撤退し、しばらくの間、建物は空き家の状態が続いていました。その後、取り壊すという話が持ち上がったのですが、実は私の祖父が大工をしており、この建物の建設を棟梁として手掛けたため、どうしても取り壊すのが惜しくて仕方がありませんでした。何とかしてこの建物を残したいと常々考えていました。

平成15年のことだったかと思います。私は35年ほど会社を経営していましたが、その間、公民館長を2年間務めました。通常、会社の社長が公民館長を務めるというのは珍しいことでしたが、それも、この建物を何とか残したいという強い思いがあったからこそでした。公民館長という立場は地域の中心的な役割を担うことになるため、発言権も重くなります。その立場を活かして、どうにかしてこの建物を残したい、そして資料館を作りたいという思いがありました。そこで仲間を募り、提案を重ねた結果、資料館として活用することになったのです。

地域には、これから消えていくものがいろいろありますが、それらを何とか一ヶ所に集めたいという思いから、どんどん収集してきました。古いものがたくさんあります。

外には「乾臼（からうす）」と呼ばれるものがあり、水のある地域では水車小屋が設けられていますが、水のない地域ではこのような乾臼が使用されていました。これは江戸時代からのものですが、現在、資料館の外に展示しております。また、消防のポンプも飾ってあります。これは両側で汲みながら水を出す初期のポンプで、こちらも屋外に展示しています（図3）。



図3. 屋外展示物の乾臼と消防ポンプ

館内についてですが、1階には主に農具類を展示し、2階には棚を設置して、生活用品や書籍、細かい道具などを陳列しています。このように、多くの品々を収集・展示しています（図4）。



図4. 資料館2階の陳列棚

こちらは「大鋸（おが）」といって、大きな木を縦に割る際に使用する道具です。皆さんもご存じかもしれませんが、葛飾北斎の『富嶽三十六景』にも登場しており、縦に引いて木を切る様子が描かれています。この作業には、この大鋸という大きなノコギリを使用します（図5）。



図5. 大鋸と葛飾北斎作『富嶽三十六景』遠江山中

かつては、祝言（結婚式）や葬儀、法事などはすべて自宅で執り行われていたため、それぞれの家に食器類が揃っていました。これらの食器類も収集し、展示しています（図6）。



図6. 食器類

また、古い電話機や墨壺（すみつぼ）、薬研（やげん）、焼酎瓶、ガリ版印刷機もあります（図7）。さらに、8ミリ映写機、古いラジオなどもございます。また、私の祖父が大工だったため、祖父が使用していた大工道具も展示しております（図8）。



図7. 電話機（上左）、墨壺（上中）、薬研（上右）、焼酎瓶（下左）、ガリ版印刷機（下右）

さらに、鍋や薬缶（やかん）、秤（はかり）、磁器類も収集しております。先ほど申し上げたように、昔は自宅で祝言を行っていたため、大皿なども必要でした。向こうに見えるものは、現在でいう「行火（あんか）」です。私たちは「バンコ、バンコ」と呼んでいましたが、これ

は萬古焼（ばんこやき）に由来する言葉ではないかと思います。この行火は、中に炭を入れて暖を取る道具です（図9）。



図8. 8ミリ映写機（上左）、古いラジオ（上右）、大工道具（下）



図9. 薬缶（上左）、秤（上右）、磁器類（下左）、行火（下右）

また、茶碗や容器類もすべて収集し、展示しています。あちらにあるのは「芝居弁当」です（図10）。ここにも実物を持ってきましたが、五毛座の話をする際に改めて触れたいと思います。昔、この地域では芝居が盛んに行われていました。昼間は仕事をしなければならなかったため、芝居は夕方から始まり、夜遅くまで上演が続きました。おそらく夜中の12時を過ぎることもあったでしょう。そのため、芝居見物の際には食事が必要となり、この芝居弁当にご飯と漬物を詰めて持参しました。本日も少し中に入れてきましたが、この箱には20人前ほど詰められており、嫁さんが用意してくれたものです。これを夜中に皆で食べ、近所の方々にも振る舞うのが習わしでした。こうした芝居弁当も、展示品の一つとして収集しております。



図10. 芝居弁当

飯地の福原尾（ふくわらび）という地域では、かつて花火が打ち上げられていました。ここにあるのは、その花火の木筒です（図11）。



図11. 福原尾の花火の木筒

向こうに見えるのは脱穀機です。その隣には縄をなう機械、さらにその隣には「千歯（せんば）」と呼ばれる、粃（もみ）を脱穀する初期の機械があります。最も奥に展示しているのは、飯地で最も古い粃摺り機（もみすりき）です。この機械には、大きな木のローラーがあり、表面にギザギザの刻みが施されています。このローラーを回転させることで、粃を玄米にする仕組みになっています（図12）。

また、囲炉裏の再現も行っており、当時の生活の様子を体感していただけるようになっています（図13）。



図12. 脱穀機（上左）、籾摺り機（唐箕）（上右）、千歯扱（下左）、縄なえ機械（下右）

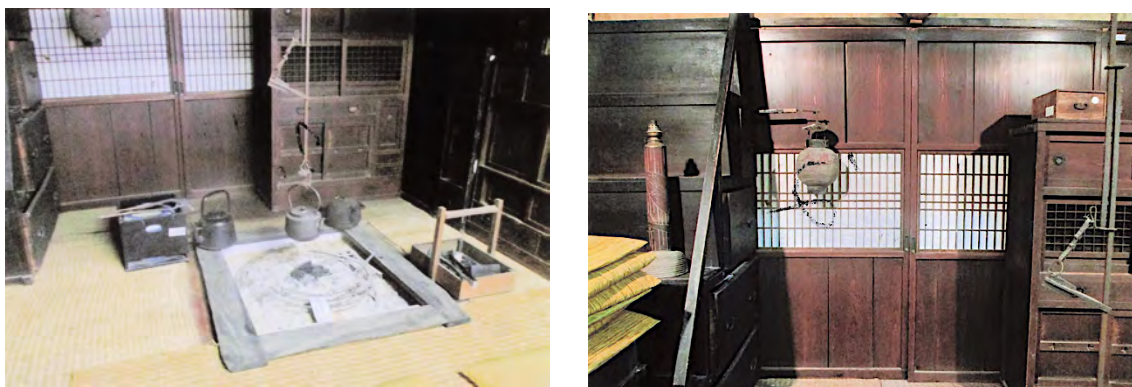


図13. 囲炉裏のある部屋の再現展示

こちらは雛人形ですが、私たちの地域では「土雛（つちびな）」が一般的です。土雛ばかりが飾られ、4月3日には「がんどうち」という行事が行われました。この日には、飾られた土雛のそばに菓子が置かれ、子どもたちは自由に持っていくことができる仕組みでした。私たちの地域では月遅れで祝うため、4月3日に行われていました。この行事が、子どもだった私たちにとって一番の楽しみでした（図14）。

また、私たちの地域は田んぼが少なく、畑が多い土地柄です。そのため、収入を得る手段として養蚕が盛んに行われていました。お蚕（おかいこ）は非常に大切な副収入源であったため、「お蚕さま」と「さま」をつけて呼んでいました。こちらは養蚕の道具です。各家庭で養蚕業を営んでいました（図15）。



図14. 土雛

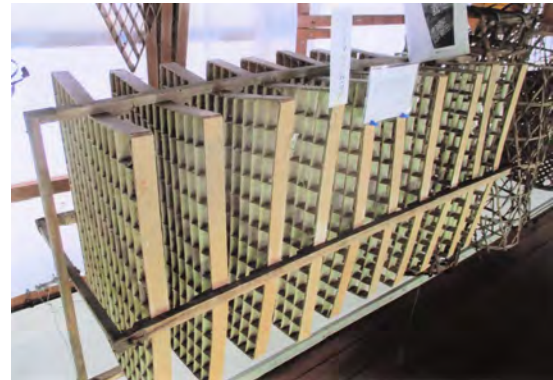


図15. 養蚕の道具

また、右側に展示している写真は非常に貴重なものです。かつて東濃地方では「霞網猟（かすみあみりょう）」という猟法が行われていました（図16）。霞網を使って渡り鳥を捕まえ、食料としていたのです。これは貴重なタンパク源であり、戦後に禁止されるまでは当たり前のように食べていました。しかし、禁止されると、かえって食べたくなるもので、こっそり続けていた人もいたようです。私自身はやっておりませんが、食べるのは好きでした。特に生姜だまり（醤油と生姜を使った調味液）で漬け込み、炭で焼いて食べると、何とも言えない美味しさがありました。そうした霞網猟に使われた道具も、すべて展示しています。

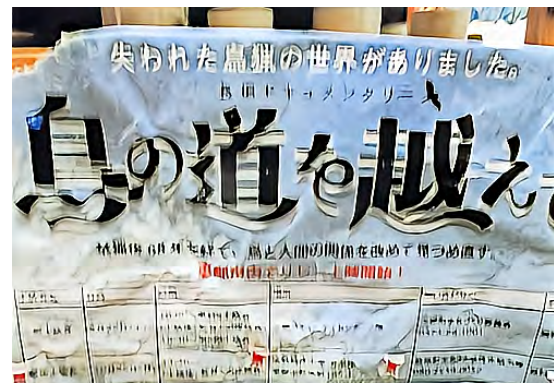


図16. かつての霞網猟の写真とドキュメンタリー映画『鳥の道を越えて』のポスター

こうした「鳥屋（とや）」の道具を展示している資料館は、おそらく他にはないでしょう。霞網も展示しようと思いましたが、警察に確認したところ、「霞網を所持していると銃刀法違反になるため、展示は避けてほしい」とのことでした。しかし、「やめてください」と言われると、かえってやりたくなる性分です。すでに使用できない霞網をここに飾っています。警察が来たら、さっと片付ける予定です（笑）。もっとも、今さらこんなもので鳥を捕まえるわけではないのですが、そういった歴史的な道具として展示しています。「鳥屋（とや）」とは、鳥を捕るための小屋のことです。夜は電気がないため、ランプやカンテラを持って行きました。

こうした鳥の生態や霞網猟の文化を記録したドキュメンタリー映画が『鳥の道を越えて』です（図16）。この映画は、東白川村出身の今井友樹監督が、この資料館をヒントにして制作したものです。そして、この映画は多くの賞を受賞しました。元々は、ここで得た知識が映画の着想のもとになったということです。

次に、こちらは縄なえ機です（図17）。壊れていましたが、半日かけて修理したところ、無事に直りました。この前、文化祭で屋外に持ち出して実演したところ、大変好評でした。縄をなうのはなかなか難しく、足で踏みながら藁を送り込み、回転させて縄をなっていく仕組みになっています。

こちらは「筵織機（むしろおりき）」です（図17）。昔の家庭では、特に女性がこの機械を使って筵（むしろ）を織っていました。昔の女性たちは本当に働き者で、当時は絨毯よりも筵の方が重宝されていました。私の祖母も96歳で亡くなりましたが、虫歯は一本もありませんでした。もっとも、それもそのはずで、すべて総入れ歯でしたから……。 （笑）



図17. 縄なえ機（上左）、筵織機（上右・下左）、機織り機（下右）

向こうにあるのは機織り機（はたおりき）ですね（図17）。現在修復作業を進めており、5月ごろから織れるように整備しています。

この資料館へは、子どもたち、小学生や中学生が見学や勉強のために訪れています。特に小学生の子どもたちは、「逆に僕たちが説明をしますので、お年寄りの方は聞きに来てください」ということで、10人ほどのお年寄りが集まり、4年生の子どもたちが展示物について説明をする機会がありました。「これは何々に使われていたものです」と、立派に説明してくれるのですが、時々「これは何ですか？」と聞くと「それはちょっとわかりません」と答える場面もあります（図18）。そういうときには、私が補足説明をしています。こうして子どもたちが展示物に関心を持ち、郷土への愛着を深めてくれることが私の目的でもあります。故郷を大切に思う子どもたちが増えてくれればと願っています。これは、ほんのりと心温まるエピソードの一つです。

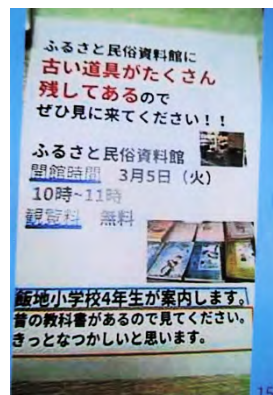


図18. 飯地小学校4年生による資料館の案内のポスター

ほんのりと心温まる話といえば、もう一つこんな出来事がありました。私の家の隣におばあさんが住んでいるのですが、先日、喉に餅を詰まらせて救急車で病院へ運ばれました。お隣のおじいさんも付き添いで一緒に行ったのですが、病院で医師が背中をパンッと叩いたところ、飛び出してきたのは餅ではなく、なんと入れ歯でした。しかも、その入れ歯は、おばあさんのものではなく、付き添いのおじいさんの入れ歯だったのです。本当に微笑ましい出来事でした。少々余談が多くなりましたね。



図19. ミズバショウ自生地

話を戻しますが、私たちはミズバショウの世話も行っています。50年ほど前に私が蒔いた種が成長し、今では一面に湿原が広がるようになりました。その手入れも、私たちの大切な役割の一つです（図19）。

また、木を伐採しながら環境整備を行うのも私たちの仕事です。さらに、畑作業も行っており、子どもたちがサツマイモを育てています（図20）。加えて、木工の作業にも取り組んでいます。つまり、私たちはあらゆることに関わっているというわけです（図20）。



図20. 環境整備としての伐採（上）、畑の収穫物サツマイモ（下左）、木工作業（下右）

地域活動として、「古道あるこまいか」というイベントも企画しました。また、伝統行事である「どんど焼き」も私たちが主催し、実施しました（図21）。



図21. ウォーキングイベントとどんど焼き

このように、資料館の運営だけでなく、さまざまな活動を展開することも大切ではないかと考えています。時には批判の声もありますが、そんなことは気にせず、積極的に進めていこうという姿勢で取り組んでいます。

しかし、展示物については、先ほどもお話しに出ましたように、大変乱雑な状態になっており、収集するだけで整理が十分にできていません。そこで、中部大学の皆さんに大変お世話になり、現在、整理作業を進めていただいております。今後も、ぜひ引き続きご協力いただきたいと思っています。私たちだけではどうしても手が回らない部分もありますので、どうぞよろしくお願いいたします。

時間が限られていますので、次に飯地の五毛座という芝居小屋についてお話しします。こちらが玄関で、これは当時建設された際の写真です（図22）。この建物も、私の祖父が棟梁として手掛けたものですので、私自身も強い思い出があります。



図22. 飯地五毛座建設当時の写真と改修を終えた現在の五毛座

今回、大規模な改修工事を実施しました。もともとこの場所は田んぼだったため、湿気が非常に多く、建物の状態が悪化していました。また、あちこちが傷んできていたこともあり、国からの補助金を活用して、大幅な改修を行いました。



図23. 観客席から見た舞台の写真、左手に見えているのが花道

芝居小屋については、皆さんもご存じかと思いますが、今回は芝居小屋の内部について少しお話ししたいと思います。こちらが観客席から見た舞台の写真です（図23）。舞台の右側を「上手（かみて）」、左側を「下手（しもて）」と呼びます。これは相撲の「上手投げ」「下手投

げ」と同じ用語ですね。一般的な日本語では「じょうず」「へた」と読みますが、こうした舞台や相撲の世界では特別な使い方をされており、日本語の奥深さを感じます。

次に、こちらに見えるのが「花道」です。花道には「七三（しちさん）」と呼ばれる場所があり、役者はここで一度立ち止まります。そして、その場で「見得（みえ）」を切るわけです。すると、客席の「大向う（おおむこう）」と呼ばれる場所から、「待ってました！ 柳谷！ 嘉原！」と掛け声が飛びます。

また、今叩いた幕の開閉などを告げる拍子木ですが、歌舞伎の世界ではこれを「柝（き）」と言います。さらに、舞台の上手の端で2本の木を板に打ちつけて「バタバタ」と音を出すものを「ツケ」と呼びます。これは、見得を切る瞬間の強調や、駆け出す時の足音を際立たせるために使われます。

五毛座では、「大入袋」に気に入った役者の名前を書き、その袋を舞台に投げる風習があります（図24）。「山口鉦一様 ○○より」といった形で名前が記されており、中には100円玉や200円玉、多いときは500円玉が入っています。



図24. 大入袋

この大入袋が、舞台の上に次々と投げ込まれるのです。これは五毛座独特の風習で、一般的には「おひねり」と言って、コインをティッシュに包んでひねったものを投げます。しかし、五毛座では大入袋を用いることで、確実に特定の役者にお金が届く仕組みになっています。

ちなみに、私が芝居に出演した際、最も多くいただいたときで5万円ほどになりました。やはり良い役者は違いますね。ほとんどの人は1万円以下ですが、5万円もいただくとなると、これはかなりの名役者ということです。まあ、こういうのを「手前味噌」と言いますが（笑）。

地芝居に欠かせないのが「振付師匠」です。これがいないと「支障」をきたしてしまいますね（笑）。それから、大夫（たゆう）、三味線、下座（げざ）、顔師（かおし）、着付け、衣装係、カツラ担当など、楽屋ではこうした役割を担う人々がいます。また、大道具係、小道具係、照明、幕引き、黒子（くろこ）——後見（こうけん）とも言いますが——といった裏方の仕事も重要です。

役者になった人は、まず配役が決まり、それからセリフを覚え、稽古に入ります。そして、前日には「三味合わせ」と呼ばれる総練習を行い、本番を迎えるという流れになります。芝居に出演する役者が5～6人でも、裏方にはその3倍、4倍の人手が必要になります。つまり、芝居というものは、それだけ多くの人が携わらなければ成り立たないのです。

こちらが現在の五毛座の内部の様子です（図25）。写真では少し分かりづらいかもしれませんが

が、今回、新しく楽屋も綺麗になりました。

これは、以前上演した『忠臣蔵 七段目』の舞台写真です（図26）。ちなみに、私も写っています。85歳の役者が舞台に立つのは珍しいと言われました。もっとも、私の役にはセリフは一切ありませんでしたが（笑）。



図25. 改修後の五毛座玄関と楽屋



図26. 『仮名手本忠臣蔵 七段目』の舞台写真

また、楽屋では「落書き」をする習わしがあり、改築後の柿落とし（こけらおとし）の際に来てくださった中村勘九郎さん、中村七之助さん、中村鶴松さんが残した落書きも、ここに書かれています（図27）。

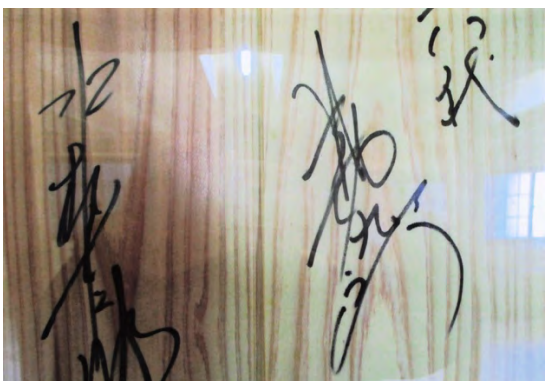


図27. 楽屋の「落書き」

こちらは市川笑三郎さんの写真です（図28）。実は彼は、この地域の出身で、芝居が大好きだったのです。この写真は、彼が中学3年生のときのものです。当時、急遽代役を務めることに

なったのですが、わずか3日でセリフを完璧に覚えてしまいました。

向こうにあるのは、私が役者デビューしたときの写真です（図28）。本当は、こうした写真を出すのは気が引けたのですが、「私も役者をやっていますよ」ということを皆さんにお伝えしたく、今回ご紹介しました。



図28. 市川笑三郎（左）、山口鉦一デビュー舞台（右）

先ほどもお話しに出ましたが、昭和10年ごろには芝居小屋を設置するためには許可が必要でした。こちらの書類は、その際に提出された願い書です（図29）。この許可を得ることで、芝居小屋を建てることができました。ここから先の部分は屋外ですが、囲いを設け、トイレもしっかり設置するなどの条件を満たしていれば、正式に許可を得たという証明書が発行されます。

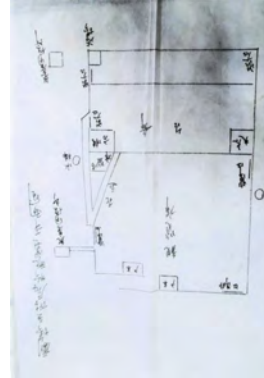
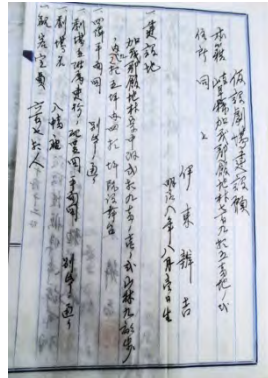


図29. 仮設劇場建設願

以上が、写真のご紹介でした。

そういうわけで、五毛座は新しくなり、今度の4月12日には地芝居が開催されます。地芝居は費用がかかるため、隔年でしか開催できませんが、今年はちょうど順番が回ってきた年になりますので、4月12日に上演いたします。ぜひご覧いただければと思います。

私も出演する予定です。先ほどお話ししたように、セリフは一切ありません。「その他、通行人その1」くらいの役どころですが、一応、化粧をし、衣装を身に着けて舞台に立ちます。すると、観客から大入袋が投げ込まれるのです。皆さんが観劇にいらした際には、大入袋が販売されておりますので、ぜひ中にお金を入れ、「山口鉦一」と書いて投げいただければ、確実に私のものに届きます。名前を書かずに投げると、保存会のほうに行ってしまいますので...（笑）。少し余

談になりましたが、そうした楽しみも交えながら芝居を続けており、これを地域に残していきたいと考えています。

平成9年からは私が子供歌舞伎を始めまして、それ以来ずっと敬老会の余興として継続されています。毎年、子どもたちによる歌舞伎が上演されており、これも地域の伝統として根付いてきました。今年も、4月12日には子どもたちの公演も行われます。小学生だけでなく、中学生や高校生も参加する予定です。また、五毛座の地元の子どもたちだけでなく、隣の村や町からも参加してくれる子どもたちが増えており、活動の幅が広がっています。こうして地域を超えて多くの子どもたちが関わってくれるのは、とても良いことだと感じています。

ぜひ、また五毛座へ足を運んでいただき、ご観覧いただければ幸いです。

とりとめのない話になってしまい申し訳ありませんが、これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。